

大通 和座通信

YAMATOZA

日々新面目

其の二十八

安東伸元

能狂言を批評した感想文を、少し紹介したいと思う。東京に事務所を定める、月刊の能楽専門紙に掲載されたものからの抜粋で、東京を中心にして一ヶ月間の主だった能楽公演を詳細に評論したものである。現在四大紙と呼ばれるどの新聞社にも、定期的な能楽欄は用意されていない。したがって、このような文章が日頃新聞紙上において、古典芸能のみならず演劇を愛好する読者の目をとらえて楽しませることはない。だから、能評などというものは、著しく専門的な価値観による作文であると認識されていると思われる。そのうちであるからこそ、私はあえて紹介したいなどと言っているわけである。まず、ある演者の能「善知鳥」の演技について、…… 凄まじい。ハコビは多少不安定にせよ、橋掛かりに立ちワキを見送る視線の、ゾツと

するほどの寂しさ。腰がピタリと決まっているからである。この寂寥感はどうせん後シテにも横溢。カケリで一の松、脇座、正先と三度杖を使う部分は大きく柔らかく、獲物をキツと見込んだ視線は恐ろしいほど冴えている。肩に無駄な力が一切なく、意識せずとも「氣」が行き渡り、型が生動している。… もっとも、同じ演者で国立能楽堂普及公演の「山姥・白頭」は不発。… また別の日の、喜多流の将来を期待される演者への評では、上つ面の格好だけ、文字とおり腰砕け… 何処を採ってもノリが平坦。さりとして綿密を極めて結果が裏返ったわけでもない。型や演出に対する考究の跡が窺えず、万事に亘りノツペラボウなのだ。クセの床几に掛かって両手を広げ下を見込む型の、何とまあ浅く弱いことか。足拍子の響きも薄い。師匠のここ、姿態の破綻を辞さず臨崖捨身の腰の強さで「金輪際」をギリギリ看破しようとする意気込みを、身近に知らぬ… ではあるまい。… その師匠の仕舞「鶉ノ段」が、目を離せない至藝の域に達している。松明に擬した扇を振り上げ大きく下を見る構えが豊かで、滑らかな岩肌を征矢のように流れる急湍が音せずして激しい水勢を含むように、靜中動を湛えた寸分隙のない造型。肩先や後姿には詩情すら漂う。批評されている演者を知っているので、私の胸には筆者の述べたい言葉の

意味が面白いほど伝わってくる。そして、最後にこの執筆者は、一つ気になること、… これほどの至藝を見せた大阪と京都の見所、もつたいないほど空席が目立った。東京以外の能文化を支える層の薄さについて、われわれは相当の危機意識を抱かねばなるまい。と締めくくっている。今月号に限ったことではなく、私はこの「能楽タイムス」紙の能評を毎月興味深く、かつ能の鑑賞理解は斯くあるべしという納得と共感をもって読んでいた。そして、このような視点と心情をもって能楽に親しみ、思索の時を遊ぶことができたなら、どれほどの栄養素が手に入る事かと思う。感性や感覚、思想や情念を育むこの豊かな滋養によって、ものの真贋、正邪、当否を自力で判断できる力（人格）が備わるはずである。音楽芸術として扱われる西欧クラシックに関する評論や解説も、まさしくこの能評と同じ切り口と精神で表明されていると思う。西洋芸術理論を云々する外来思想と解説は学習の趣で熱心に読むけれども、自国の古典論議はチンプンカンプンな採るに足らぬものと、粗略に或いは慇懃無礼に扱う社会風潮が根強く存在する。しかし私は、たとえば六月の能を批評された前出の村上湛氏のような文章に、心休まる親近感を覚えるのである。日本人が自国の文化や芸術の本質を知るために、これほど最適な芸能素材と、

解説の言葉はないと思う。このような関係が、すなわち古典と人間が共生することの真実の意味であると思う。私は四〇歳を過ぎた頃から、行動の規制を受けねばならぬ師匠という存在を持たぬ生き方を展開してきた。入門以来約二〇年以上経ってからの事であるから、これは当たり前のことである。むしろ、一旦師事先を決めたが最後、その流派や家に仕える者として生涯従属させ、その弟子の自立を助けも促しもせず、飼育殺しの状況で、世代交代による当主の変更があつても、この従属関係が続くという古典伝統芸能界の身分制度の在り方こそ不審である。この因習には何の妥当性も真理もない。わざわざ麗々しく武家式楽の看板を持ち出すのと同様、そこには権威を誇示せんがための底意しか見えてこない。個人が師匠へ持ち続ける敬愛の念は別にして、長年月師家に仕える事を良俗美德とする觀念は、ただ特権を持つ者を利するだけのものである。権威と美名に飾られた師匠を求めたいわけではないと思つたら、つまり寄らば大樹の陰や親方日の丸の安泰を望まないと決心したら、それより先は、荒野を独り行く旅を覚悟しなくてはならない。しかし、この独り旅は、数多くの新たな師匠との出会いをもたせしてくれる。不思議なことに、その師匠たちも孤高に生きて独り旅をする人が多い。そして、洋の東西を問わ

ず音楽家であつたり作家であつたり、俳優であつたり思想家であつたりする、その人たちから受ける衝撃や感動を、わが住処に持ち帰る楽しさと喜びが手に入るのである。そこで初めて、芸術創造の自由の天地を知覚して、孤独の不安と寂しさから解放されるのである。この仕組みの理不尽さが明るみに出されようとしている。起因は、道路公団・社会保険庁・林野庁などを先頭にする官僚組織に対する批判、政党や政治家の体質批判などの大噴出である。つまり旧体制に対する臨検と再検討が一斉に始まるうとしてるのである。私は繰り返し言うが、伝統芸能の世界について、不公平があるとか、不合理的な差別意識が存在するなどと云う事を殊更問題視して物言いをしたいと思つているわけでは決してない。我が国の思想の根幹に根を張っている上意下達と、本音と建て前の構図が何故か一向に改善されない旧態の悪弊のお陰で、世界に通用する文化の珠玉宝物が、もつたいたなく死蔵されたままであることを憂え悲しんでいるのである。このことを告発する論説は、すでに国のあらゆる要所に存在し、また明治維新以来しばしば海外の知識人からも指摘と警告が発せられてきた。にもかかわらず、国体維持のためこの構図は変えられず発展してきて、とうとう今日にいたつて不合理と矛盾が修復補綴の叶わぬ処まで立

ち至つたというのが今日の様相であるように思う。その結果として、既得権益を持つた旧体制の人間と、その体制の改革をよしとする人間とのせめぎあい、ようやく少し始まるうとして見えるように見えぬこともない。長年月押しつけられ見せつけられてきた構図に、うんざりしている人間が明らかに増えているようである。私は近頃、真実の古典は、その時代の最先端に位置する英知と背中合わせに在る、という図式を思い描いて物事を考えています。つまり進化や流行の有様を巨大な円と考え、起点が先端の終点と繋がつて一周期を形成した時、最も古いものが最も新しいものと隣り合わせになり、互いに触発し合つて更に新しいものを生み出してゆくという図式です。この場合の古典は、紛う方無く人間の精神の根つ子に作用するもので無くてはならない。ところでわれわれが知る、われわれの国の古典は、懐古・郷愁・望郷・追憶などなどの言葉によつて身近に理解され、教養や高尚な趣味を飾る重要な対象素材とされる。大伽藍の枯山水の庭園を背景にした書院で、いかにも高僧然とした仏教者が、含蓄には富んでいるようだがどうも心に響かない法話を語り、それを知識人といわれる学者などが持ち上げて取り繕う。古典伝統芸能は学習した上での鑑賞が必要と教えられ、或る流派または名家の当主が、いかにも熟知

り顔の文化人と対談したりする映像を見せられる。このように切り取った古典しか提供されない社会の現状に、私は飽き飽きしています。抽選で選ばれて満員の大ホールに集められた未就学児童と若い両親たちが、着ぐるみの怪物めいたモノが踊りはねているに過ぎない、他愛もないバラエティに身をゆだねきつて遊び興じている。見ていると恥ずかしくなるような人情劇が、莫大な経費を使って毎朝・毎週制作され、宣伝通りに大衆を動員して志向を誘導する。音楽や文学作品を採り上げ、映像を編集し、話題の人や人気者を登場させて、涙であれ笑いであれ感動というものを呼び起こす仕掛け作りに熱心な人たちがいる。そこに見られるものは、薄っぺらな思考と小細工を効かせた小才で、歴史を背負った人間の重みなど微塵も感じられない。だからといって、ドイツの古城やフランスの古聖堂、イギリスの田園、イタリアの遺跡などを観光して、眼を奪われ心が震えるような感動を味わったとしても、所詮それらは借り物に過ぎない。われわれ日本人の心の核心に届いて、それを揺り動かすことはない。自国の古典を知らず、古典伝統の真実を説明する言葉の理解もできない国民に成り果ててしまった、ということ性を根を入れて自覚することから始めようではありませんか。

(八月十日)



安東伸元(あんどうのぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

台詞の向う側

何を思うかは勝手次第

森五六九(もりごらく)

「こんにちは」「おお、熊さんかいな。待つてたんや。ささ、こつち上がつておくれ」「へえおおきに。実は今日、今朝から堺の方に用事行とりましてな、で帰つて来るなり嬢が母屋の用事や、早い事行てきなはれ、ちゆうて。へえ、急いでやつてきましてん」「忙しいとこすまんだな。実は倅、作次郎の事やがな」「若旦那が・・・」これは「崇徳院」という落語の冒頭。熊さんは旦那のところに入りしている職人で日頃からずいぶん世話になっている。熊さんは歳の頃なら三十前後、熊の家は嬢天下で旦那の店は結構な大店。たつたちよつとのやり取りでこれだけの情報がお客に伝わる。いや伝わらなければならぬ。でなければ演者が未熟と心得なければならぬ。よく出入りしている家なのか久しぶりに訪れる家なのかは「こんにちは」の台詞ひとつ。それに目線や言葉遣い、態度、所作・・・情況や心情を伝えるのは何も言語に限ったものではない。言葉は少なくて済むならその方がいい。

「定吉」「へーい」「何という返事をしますのじゃ」「丁稚もの」と呼ばれ

る落語の出だし。丁稚の定吉はわざと返事を伸ばしていちびつてゐるのだが、問題はそれを咎める旦那さんの言い方。それ次第で定吉の印象がガラリと変わってしまう。本気で心底怒ってしまったのか、しゃあないやつちやという愛情が入った咎め方をするのか。それによつて旦那さんの人物像のみならず定吉像が決まつてくる。定吉の可愛らしさ屈託なさを表現するのは定吉の演じ方以上にそれを取り巻く環境にある。「アホやなあ」の一言もニュアンスによつて全く違つたものになる。

「演者とお客の共同作業」とはよくいったもので、お客は演者の発する言葉をヒントに頭の中に映像をこしらえていく。また、落語は想像の芸であると同時に省略の芸。私の師、故春蝶はこう言った。「咄家は喋るな」。十喋つて十伝えるより、一喋つて十伝えること。ここに春団治、春蝶と受け継がれた芸の系譜がある。落語作家の小佐田定雄氏も著書の中で「情報量と想像力は反比例する」と述べておられる。情報量をいかに減つて余白を残すか。この余白の部分がイメージーションの楽しみ。想像の楽しさは台詞の向こう側にある。

奉行の名を語り材木置き場でお奉行ごっこに興じていた子供。それを当の奉行に見つけられさつそく白州へ呼びつけられた。

「与力の身分とは？」と奉行に問われた子

供。持っていた起き上がりこぼしを前へ転がし「この通りでおります」「この通りとは」とかく身分の軽いもんでんねんけどな、下にお上という重りがついてまつさかいピョンションしてまんねん。けど踏んだら潰れる骨のないやつばかり」「何という事を申す。・・ではその方、与力の心意気を存じおるか」今度は持っていた半紙でこよりを作り天保銭の穴へ通して起き上がりこぼしの腹に括りつけて前へ転がした。横にもりがあるのでそのままゴトツ。「とかく金のある方へ傾くわ」。これは「佐々木裁き」という落語。あくまで江戸時代のお噂である。これを現代に置き換えたりどう感じるかはお客の勝手次第。

「佐渡狐」という狂言がある。「佐渡にも狐がいる」と言い張る佐渡のお百姓と「いない」と主張する越後のお百姓。各々の太刀を賭けて奏者様に裁いてもらうことになつた。ところが、佐渡のお百姓は狐など実は見たこともなく見栄を張つてついで「いる」と言つてしまつたというのが実情。今さら白状するわけにもいかず佐渡のお百姓は何とか自分の都合のいいよう裁いてもらおうと奏者様に賄賂を渡した。と、これもあくまで室町のお話。現代と結び付けて観るかどうかはやはりお客の勝手次第。結論はお客様に委ねる。

大阪商人の心得に「下駄を預ける」とい

う言葉がある。例えば「今日は何曜日やつた？」とお客に聞かれ、「今日は何曜日でおます」といった答え方を大阪商人はしない。「そつでんな。今日は水曜日とちやいまつか？」が正解。分かつていても結論はお客に委ねる。お客はそれを受けて「そやそや、今日は水曜日やつた」となる。お客を常に優位に立たせるのが商人の心得だ。また、聞き返すことによつて会話を続けさせるといふ利点もある。ところで、住み込みだつた私は日常茶飯事師匠から叱られてばかりいたが懇々と説教された記憶がまるでない。私がかしくじりを侵すと師匠は「おい！」と言つた後、私の目をじつと見据える。「すみませんでした」と頭を垂れる私に師匠はしばしの無言。「何があかんか分かつてるやろな」とでもいいかげんな眼差しできつと睨んでたつた一言。「分かつてるやろな」小言は本当にいつも小言だつた。ああだこうだと懇切丁寧に言つより自分で悩ませそこから結論を出させる人だつた。ともあれ結論は自分で出したり委ねられたりした方が反省が深まる。

この七月より大阪シナリオ学校にて「落語台本塾」を始めた。漫才台本や番組構成などを手掛けておられる作家の高見孔二氏を囲んで月一回集まることになつた。氏は元々落語が書きたくてこの世界に入った御仁だ。塾生は現在十五名。その塾生たちが

持ち寄った作品について氏や私が中心となりアドバイスを加えていく。メッセージ性の強い作品が並ぶが、その思いが勝ちすぎで重く感じたり口説く感じる作品もある。言葉や情報は削ぎ落とし、やはり結論はできるだけお客さんに委ねていくことも大事だ。先に述べた通り現代への警鐘を伝えるに必ずしも現代が背景である必要はない。古典同様江戸時代を舞台にした作品を「疑古典」というがこれもひとつの方法。お客がどう感じるかは勝手次第。言い過ぎないことはとかく難しい。しかし、その余白の部分にこそ芸の楽しさがあると心得てどれだけ余白を残すか。余白は・・・と、これ以上書くとますます口説くなりそうだ。そんなわけで今回はこの辺で。ちなみにこれから新作の発表はできれば年内を目指している。(了)

二〇〇七・七月吉日



森五六九(もり)「ごらく」
大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECCAーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

「狂言で立つ」

金久蒼汲

「すべては立つことから始まる。」とは、私の演劇の恩師、秋浜悟史先生の言葉です。この言葉は先生の演技指導「立ちの構え」で使われた言葉です。正確には「立ちとは立つこと、出で立つことでもある。門出である。出発である。すべてはここからはじまる。」見物に正面切つて考えや思いを伝えるための基本姿勢としての「立ち」の説明に用いられた言葉ですが、私にはこの言葉が単なる演技指導の言葉ではなく、演劇を志すものとして、一人の人間として自立するための心構えを教える言葉であるように思え、以来ずっと心に刻み込んでいます。先生は「ことば」をとても大切にされる方でした。解らない言葉を見つけると、字引を引いてはほくそ笑んで、言葉の妙と戯れていらつしやいました。先生の話される言葉、残された戯曲や楽書きには、そうしたお戯れの洗礼を受けた愉快的言葉遊びが踊っていました。また能楽、とくに狂言への愛着が深く、ご自身も若い頃に稽古を積まれたそうで、その手法や価値観、言葉や思想は先生の戯曲や演技指導に色濃く見ることが出来ます。また先生は指導者という立場でありながら、私たちと同じくひと

りの学生のような方であったと思います。「教えることは、教えられること。」が常套句で、常に若者を尊重し見守りながら、先陣切つて劇遊びに取り組まれた、型破りの教育者でありました。老若男女、直接間接問わず、この秋浜語録にまみれた劇遊びに集えた仲間たちはもはや星の数ほど。そしてその仲間たちが新たな仲間を募つては、それぞれの秋浜イズムを胸に、これから徹底的に遊び抜くことでしょう。恐れながら私も冒頭の言葉を胸に、私なりの秋浜イズムを展開したいと企てている一人なので

す。「立つ姿勢にあらゆる動きの可能性が詰まっている。」これも冒頭の言葉の続きとして用いられた先生の言葉です。「演技の基本はまず立つことです。いかにも人間らしいあり方であり、次の無駄をなくすための切りつめた立ち方です。相手役に相見え、考えや気持ち伝える場合の基本形を作ることです。」足は肩幅に開き、腰をすえ重心を感じながらわずかに前傾姿勢をとる。顎を出さない、お尻を出さない、胸を突き出さない、猫背にならない、肩を詰めない、首をすぼめない。「視線は壁を突き抜け水平線の彼方まで。」足の指を目一杯広げ、何度もつかもつとすると、だんだん足が地面にめりこんで行くイメージ。ついにはズッシリ重くなり、地中深くしつか

りと根を生やす。「不断の決意で腹筋はだらけさせまい。」そのほかここには到底書き切れないほど多くのことを教えてくださいました。古来演劇は、姿勢・態度の作法（仕来たり）を学ぶ機会でもあったと言われるように、先生の「ことば」たちは、役者として舞台上立つもののみならず、日常生活のあらゆる状況においてより人間らしく生きるための手段として、常日頃私たちを奮起させてくれています。これこそが「劇表現」と名づけられた先生の演劇教育であり、人間教育であり、もはや全人教育であったと言っても間違いではないと思います。

大学を卒業し、プロの劇団への入団が決まっていた私に、あるとき先生は笑顔でこう仰いました。「できあがった劇団に入るなんて卑怯だよ。」ナイフで切られたような心地で、のちに私が劇団を辞退した理由の大半を占めるほど、影響力を持った言葉でした。決して出来合いのものではなく、自ら探し体験し、吟味し思考し整理し、試行錯誤したもので勝負しなさい。自らの感性で世の中と向き合いなさい。そう諭された気がしました。それから数年経ちますが、このことが今なお私を大和座に関わらせ、安東先生の下で稽古を積んでいる大きな原動力のひとつであることは言うまでもありません。そんな折にふと自分の思い描いて

いたことのひとつが、ようやくある形になって表れてきました。今年十月十二日（金）よりNHK大阪文化センターで開講される「狂言エクササイズ」です。前号でも少しご紹介しましたが、このエクササイズは、私たち日本人に最も適した狂言の発声、所作を訓練し日常に採り入れることで、精神的にも肉体的にも健康的なからだ作りを目指すというものです。「立つ」「歩く」「謡う」をキーワードに、内に秘めた自己表現力を探ります。小難しい蘊蓄も良いけれど、まずは動くことから始めましょう。からだが変われば心も変わると暗示をかけた、受講生と担当者と一緒にこの講座を成功させたいと思っています。日頃狂言に対して、鮮度を落とさず、これまでにないもつと有効的なアプローチはないものか、より人間らしく生きるためにもつと日常に採り入れる方法はないものかと考える私にとつて、この講座は大きなチャンスになり、大和座の新たなスタンスになり得るのではないかと考えています。秋浜先生にご教授いただいた「演劇教育」安東先生に教えていただいた「古典教育」大和座で得た知識と経験が将来花開いて、私の感性に裏づけされた「古典演劇教育」を展開させる日を夢見て、私はまず狂言の姿勢で立つことから始めたいと思います。決心もあらたに、秋浜先生も生きる指針にされていたこの言

葉を添えて、この項を終わりたいとおもいます。
 「願力を起こして、一期の堺ここなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。」

「興味を持つこと」

原 斗轟

七月三十一日 恩師の命日に



金久蒼汲(かねひさ そうきゅう)
 広島県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉体訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。
 二〇〇三年イラン公演、二〇〇四年インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

私の出身校である大阪芸術大学舞台芸術学科には古典芸能研究という安東先生の授業があります。学生時代に安東先生の薫陶を受けたのがこの授業です。今年、安東先生のお手伝いとしてこの授業に参加しています。安東先生の授業は他の授業に無い刺激に満ち溢れています。知識を切り売りするような授業ではなく、常に問題を投げかけ、学生の意識を刺激しながら授業を進めていきます。このような授業ですから当然学生には何らかの反応がありました。私も学生時代には授業の終わりに安東先生の元へ反論に行った覚えがあります。大学で受けられる授業の中ではとても貴重な授業だと思っています。しかし近年、学生の反応が無くなってきたと安東先生は仰います。授業中に学生を観察してみますと、確かに私が在学中だったときよりも反応が減っていると感じました。

どの授業においても授業を真剣に聞いている学生と途中で寝てしまう学生はいます。私が驚かされるのは、その中に何の反応も示さず、自宅にいるかのように振舞う学生がいるということです。授業を聞くわけ

もなく、寝るわけでもない。鞆から鏡を取り出し前髪をいじってみたり、ただ時間が経つのを待っていたりといった具合です。謡の稽古が始まると寝てしまった学生でさえ目を覚まし、がんばって謡おうとしますが、そんな反応すら示さない学生がいるのです。何の反応もないという事に驚きます。大学でなくても彼らと同世代の人間と話をする場合、同じような事が起こります。ある事柄について話をしていると突然話の内容とは別の話を彼らは始めてしまいます。話を元に戻し「どう思う」と聞くと「何とも思わない」と答えるのです。普通に会話をしていけば、同意したり反論したり何らかの反応があるものです。そのようなやり取りが色々な感情を湧き上げらせ人間関係を形成していくものだと思うのですが、彼らは相手の話を聞き終わる前に何の反応も示さないまま自分の話を始めてしまいます。また驚くべきことに彼らの大半は互いに反応しないまま自分の話を喋り続ける事に何の疑問も持っていないのです。

なぜ授業を聴くことが出来ないのか、会話をすることが出来ないのか、そのことについて彼らと話をしてみました。その話の中でいくつか分かった事があります。彼らは物事に対しての感じ方が非常にドライで「何とも思わない」という発言でも分かるように感情の起伏がないのです。また考え

る事と悩む事とは彼らにとつては似ていて、授業などで考えを要求されるような場では悩む時と同じようなストレスを感じると思います。しかしこれは二次的な原因であると思います。一次的な原因はなにか。それは物事に興味を持ってないという事ではないでしょうか。興味を持つことが出来ないから、反応が出来ない。「最近興味を持ったことはあるか」という問いを彼らにぶつけてみると、反応は様々ですが皆口々に「興味があることは無い」と答えます。中には「仕事の事でさえ興味が湧かない事がある」と答える者もいるほどです。このような若者の無反応ぶりは、かなり深刻になりつつあると思います。詳しく話を聞いてみると、彼ら自身も興味が持てないことに危機感を感じてはいるようです。

大和座の先輩である金久蒼汲は「彼らは興味が持てないのではなく、興味の持ち方がわからないのではないか。」と言います。私もその通りだと思えます。彼らは危機感を感じていてもその解決方法が分からないのです。そして今後このような危機感を持った人間は若い世代だけの問題では納まらず世代を問わず増えてゆくと思いません。私達はこの問題を真剣に考えねばなりません。

授業の中で後輩達にこれらの事を問いかけ、良い反応を導き出せたらと思います。

後輩達に良い変化が起き、自分達のやることに意味を見出していけるように、共に取り組んでゆきたいと思えます。



原斗轟(はら とこうつ)
福岡県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東伸元の薫陶を受け、卒業後安東伸元に師事。古典の力を体内に埋め込み、現代演劇の様々な分野で生かすべく自身を鍛えている。二〇〇七年八月『兵士の物語』に於いて兵士役を勤める。

「自分を見つめ直し、自身と闘う」

寺西将惺

私は、2001年4月に大阪芸術大学・舞台芸術学科へ入学し、2005年3月に同大学・同学科を卒業しました。学科に安東先生の「古典芸能研究」という授業があり、その授業を通じて日本の伝統芸能である狂言に出会いました。授業で古典の持つ魅力と奥深さに触れた事が後に私が大和座と関わっていきつかけの一つとなりました。

私は、俳優を目指し役者の勉強をする為に大学へ行きました。しかし、大学生活を送る内、次第に「自分が日本人として舞台に立つにおいて、核となるものが無いのではないか。」という思いに駆られていきました。そして、思いを抱えたまま大学4年生を迎え、卒業後の進路も決まらずに悩んでいました。そんなある日、私の大学の同級生であり、大和座で勉強をしていた友人から大和座の公演のお手伝いをしてみないかと誘われ、2004年12月8日(水)にA&Hホールで催された大和座の公演をお手伝いさせて頂く事となりました。その

時の経験と大学の授業で感じた古典への印象が結び付き、2004年の暮れに大和座の門を叩く事へと至りました。

大和座で色々な事を勉強・経験させて頂く中で最近よく考える事があります。それが「自分を見つめ直し、自身と闘う」という事です。以前、稽古後に大和座の面々で話をしていた時に、「自分にとって楽な道か、楽ではない道か選択を迫られた時は、楽ではない道を選ぶ事。」というような話がありました。その時の私は、なんとなく話を理解したつもりでいましたが、最近その言葉が頭の中に浮かび上がってくるような事がいくつもあり、次第にその言葉が頭から離れなくなりました。その事が自分自身の行いなどを見つめ直すきっかけとなりました。

楽な道、楽ではない道。最近の自分にはどちらの選択が多かったか振り返ってみますと、楽な道の選択が多く、その選択には自分が意識していないものと、意識しているが気付かない振りをしていたものがあり、自分自身の行いにハッとさせられました。意思の強弱に個人差があるにせよ楽な道を選んで簡単に得たものは、あまり深みがなく飽きやすいものではないだろうか。反対に、楽ではない道を選べば失敗するかもしれない。しかし、失敗を恐れずに挑戦していく事自体が、深みがあり何ものにも代

え難いものになるのではないだろうか。そう考えると、私は後者の選択に魅力を感じました。その情熱を冷まさないように、自分を見つめ直しながら進んでいきたと思います。

又、私は「自分自身」とは形の無いもので捉えようの無いものだと考えています。だからこそ、人は誘惑などに晒されているのかもしれない。そんな時こそ自分と向かい合い、楽ではない道に挑んでいく事が自身と闘う事なのだと思います。そして、私は大和座という場を、単に役者としての技術を学ぶだけでなく、自分自身の核を創り上げていく場として、ぶつかっていいことと思います。



寺西将惺(てらにし しょうせい)
広島県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。俳優を目指して勉強するさなか大学の講義において狂言と出会う。古典芸能から多くのものを学ぶ中、現代の芸能に対する姿勢を見つめ直し、日本人として世界に通ずる俳優に一步一步近づいていくよう修行中。

大和座狂言事務所関連 催しのお知らせ

九月

四日【火】午後六時三十分 姫路キャスパーホール

講演「能・狂言さいしよの一步」無料(要申込)

お問い合わせ: 姫路キャスパーホール

〇七九二八四五八〇六

二十九日【土】午後一時 浜屋敷

狂言をあそぼう

『仮面をつければあなたは誰』狂言面いっぱい』

「仏師」

「腰祈り」

講演と演習「狂言面をつけてみよう」

お問い合わせ(申込要): 九月二日より電話受付

一般 一五 円

賛助会員 二二 円

正会員 一〇 円

吹田歴史文化まちづくりセンター『浜屋敷』

〇六四八六〇九七三二

十月

三日【水】午後二時

A&Hホールシリーズ公演

「古典伝統芸能と出会うひととき」その四十九

新シリーズ「眞の古典力」

『閑吟集を謡つ』

小舞

狂言『六地藏』

入場料 会員 一〇二 円

一般 一五 円

お問い合わせ A&Hホール

〇六六八七三二六 七

十四日【日】午前十時四〇分 森ノ宮医療専門学校

北辰会秋季研修会

『伝統鍼灸と古典芸能』 (対象・関係者のみ)

「神鳴」「講演」

十九日【金】午後一時 郡山高等学校講堂

奈良県立郡山高等学校

『古典芸能鑑賞会』

「狂言と落語」

二十四日【水】午後二時 加茂町文化センター

「あじさいホール」

京都府立木津高等学校

『芸術鑑賞会』

「時うどん」「七度狐」

「呼声」「狂言演習」

二十七日【土】午後六時半 ワッハ上方演芸ホール

桂蝶六入門二十五周年記念独演会

「愚直」

出演・桂春団治、桂蝶六、桂吉坊

海老一鈴娘(太神楽)

安東伸元(大蔵流狂言方)

森達也(蝶六長男)

森聖龍(蝶六次男)

入場料 前売り 三〇 円

当日 三五 円

お問い合わせ

賑わいや 〇六六一六七・二五二五

チケットぴあ 〇六六三六三九九九九

十一月

十七日【土】午後一時 羽衣国際大学

「一号館四階一四〇一教室」

『第三回 HEC狂言の会』 (公開無料)

「鬼瓦」「しびり」「口真似」「因幡道」「伊呂波」

「伯養」「梟」他

NHK大阪文化センター新講座

『狂言エクササイズ』

講師 / 金久蒼汲

開講日時 / 毎月第二、四金曜日

午後一時～二時半

(初回は十月十二日です)

このエクササイズは、私たち日本人に最も適した狂言の発声、所作をを訓練し日常に採り入れることで、精神的にも肉体的にも健康的なからだ作りを目指すというものです。

「立つ」「歩く」「謡う」をキーワードに、内に秘めた自己表現力を探ります。

お問い合わせ / NHK大阪文化センター
Tel / 06(6343)2281

<http://www.nhk-cul.co.jp/school/osaka/>

編集後記

毎年8月には大和座恒例行事の一つである『虫干し』を行います。

普段舞台上で使用している装束などを修繕したり、糊をかけてアイロンをしたり、狂言に関する小物等を作成したり・・・年に一回大和座が所有している全装束を一度に見られる貴重な日でもあります。

袴や肩衣などには糊をかけますが、ここに使用する糊は「布海苔(ふのり)」という海産の紅藻類で、それを板状に干し固めたものを煮て糊として使います。板状の固形をなべに入れ煮ていくと、とろみのある液体になります。とろみ加減は長年の感に頼るしかありませんので、この加減は勉強中です。

その煮汁を冷まして刷毛を使って塗っていきます。後は自然乾燥をさせるわけですが、市販のスプレー糊を使ってアイロンをかけるより、布海苔を塗って乾かした方がパリツとします。

朝から糊をかけたたり、アイロンをしたり、縫い物をしたり・・・まるまる一日をかけて作業をしますが、稽古場一杯にならべられた装束はちよつとしたみもので、感動を覚えます。

襟、紋腰帯、肩衣、袴など、パリツとした装束は本日のA&Hホールで初お披露目

です。

8月といえば、2月の艸言会で一年を締めくくると大和座にとつて、丁度一年の折り返し時点にあたります。

昨年、初の試みとしてA&Hホールの8月公演を昼の部と夜の部とに分け2回の公演を行いました。この形式にご好評をいただき、今年も2回の公演を行うことになりました。昨年と同様、昼はこども向け、夜は大人向けの公演です。

さて、この昼のこども向けの公演ですが、こども狂言教室の講師を勤めている小田と金久が企画と進行を担当しております。8月4日に関西大学で行われた催しも、若手が企画と進行を担当し、こどもをメインにした参加型ワークショップを展開しました。このワークショップも良い評価を得ました。大和座が目指すワークショップは、ただ単に日頃できないことを子ども達に体験させ「あゝ楽しかった」という一時的な喜びを与えることが目的ではありません。大和座は、何か本来持っているはずの日本人としての感性に働きかけるワークショップにしたいと考えています。すぐには気づかなくても、このワークショップの経験が、自分が大人になって「自分自身」を考える場面に直面した時、その答えを見出す助けになると信じ、そうなるように努力しています。これらの催しもそうですが、最近の大和

座ではワークショップの企画やメインの進行を若手が勤めることが多くなってきました。それだけではなく、かつて自分が学んでいた場へ教える立場として立つことも増えてきています。大和座の若手がまた一歩前進した出来事だといえます。

「教えることが一番の勉強」と言いますが、与えられた台詞を言うのではなく、自分の中で培われてきた知識や感性を発信するというのは責任と覚悟が必要です。自分が学んできた事が本当に身についているかどうかというのは人に伝えて初めて確認できることでもあります。また、自分の考えを相手に伝えるという事は、自分を振り返る事にもなります。文章を書くことも、相手に自分の考えを述べる事も、常に頭の中で考え感じているからといって、それを上手く表現できるわけではありません。自分の中に蓄積されたものをきちんと発信するにも訓練が必要です。さまざまなワークショップにこども狂言教室など、大和座の若手は幸いにその訓練の場に恵まれている気がします。若手の面々が、先生や先輩方をみて憧れと興味を持ち、学びの姿勢で「見る側」にいたのが、今度は自分達が発信する「見られる側」へとしっかりと成長を遂げているように思えます。

最後にご案内が二つあります。

その一、もともと安東先生が出講されていたNHK大阪文化センターに新たな講座が開設されることになりました。講座の担当は金久であり、講座名は『狂言エクササイズ』です。安東先生の講座も続きますのでこれでNHK文化センターの狂言講座は二つになります。安東先生と同じく金曜日に開設されますが、時間帯が異なりますので、そのまま両方を受講する事も可能になります。

今まで学んで咀嚼した事をどのような形で発信していくのか、とても楽しみみです。講座に関する申し込みやお問い合わせは、NHK文化センターへお願い致します。(問い合わせ先は同通信11ページに掲載)

その二、大和座のホームページがリニューアルされました。今までたくさんの方が大和座のホームページに訪れてくださいました。本当にありがとうございます。リニューアルされたホームページには今まで以上の情報を載せていこうと思っております。まだ全てのページが完璧に整っているわけではありませんが、大和座の紹介から狂言に関する内容まで、有意義な情報を発信していくつもりでありますので、どうぞよろしくお願い致します。通信の最後にホームページ

ジのURLを載せておりますが、ヤフー等の検索エンジンで「大和座狂言事務所」と入力していただくと、より簡単にご覧頂くことができます。

大和座は一歩ずつ確実に成長していきます。その成長振りをこれからもどうぞご期待ください。

秀

発行日 二〇〇七年 八月 二九日
 編者 許 秀美
 発行者 安東 伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五〇八四二

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza
 e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp